

[論文]

## 琵琶塚古墳再考

杉井 健

A Study of the Biwazuka Tumulus:  
A Fifth Century Keyhole-Shaped Burial Mound in Kumamoto, Japan  
Takeshi SUGI

### 要旨

琵琶塚古墳は、熊本県下益城郡城南町所在の塚原古墳群に築かれた前方後円墳である。現在、当古墳の築造時期については見解の一致をみていないが、その原因は埴輪の時期がさまざまに評価されていることにあると思われる。そこで、埴輪を分析することに加えて、当古墳の調査で出土した土師器、須恵器をもあわせて具体的に検討を行い、その築造時期を集成編年7期前半、須恵器でいえばTK216型式期であると推定した。

キーワード：琵琶塚古墳、埴輪、土師器、須恵器、集成編年7期前半、塚原古墳群

### 1. はじめに

琵琶塚古墳は、熊本県下益城郡城南町に所在する国指定史跡・塚原古墳群つかわらに築かれた前方後円墳である。当古墳群に現存する前方後円墳はほかに花見塚古墳を加えて2基のみであるから、これら古墳の重要性は容易に知ることができる。なかでも琵琶塚古墳は、塚原古墳群中、唯一埴輪を有する古墳であるため、その位置付けは当古墳群のみならず熊本県地域の古墳時代を考察するうえできわめて重要なものとなる。しかし、琵琶塚古墳の築造時期については見解の一致をみていないのである。

こうした問題点については以前にも指摘したことがあったが(杉井2004：p. 8)、その時は琵琶塚古墳の発掘調査で検出された遺物を具体的に検討することができなかった。そのため、各種出されている見解のなかで、もっとも妥当と判断できるものを指摘するにとどまっていた。

古墳の築造時期の決定は、首長墓系譜研究、さらにはそれをもとに行われる古墳時代政治史研究にとって、もっとも基礎となる重要な作業の1つである。したがって、研究者各人がみずからの根拠を明確に示しながら古墳の時期決定を行うことが肝要である。それを怠れば、他者による検証作業を困難にするばかりでなく、高次の議論に発展させることも難しくなる。

そこで本稿では、琵琶塚古墳の調査で検出された埴輪、土師器、須恵器の検討を通じて、その築造時期についての私見を提示する。これは、塚原古墳群とその周辺にある集落遺跡の分析から古墳時代の社会構造を明らかにするという研究課題へ向けての基礎作業でもある。

## 2. 問題の所在

**琵琶塚古墳の概要** 琵琶塚古墳は墳長51mの前方後円墳で、墳丘のまわりにはそれにそったかたちの周溝がめぐらされている(図1)。発掘調査はこれまでに2度行われており、1度目は1973年度の熊本県教育委員会による調査(野田ほか1975)、2度目は1985年度の城南町教育委員会による調査(豊崎・清田編1987)である。いずれの調査でも周溝部分に発掘区が設けられ、その埋土中から円筒埴輪や朝顔形円筒埴輪、土師器、須恵器、青磁の破片が検出された。他方、主体部の内容は明らかでないが、残存する後円部墳丘上で凝灰岩の大小破片が採集されたことから、凝灰岩を用いた埋葬施設の存在が推定されている(野田ほか1975：p.145)。

**築造時期にかんする諸見解** 琵琶塚古墳の築造時期については、論者によりかなりの開きがみられる。前方後円墳集成編年(広瀬1991、以下では集成編年と記述)でいえば3～4期から8期までの差異である。

まず、発掘調査報告書で示された見解を記しておこう。そこでは「平面形態の類例、塚原古墳群の調査資料、遺物などから考えて400年代後半から500年代前半に位置づけられる」とし(豊崎・清田編1987：p.117)、特定の時期に限定することをしていない。

これに一步踏み込んだのが高木恭二で、「5世紀末ないし6世紀初頭頃になってから築かれた」との見解を示した(高木1990：p.33)。その根拠は5年後に書かれた「V期の埴輪を持つ全長51mの琵琶塚古墳が6世紀初頭」とい

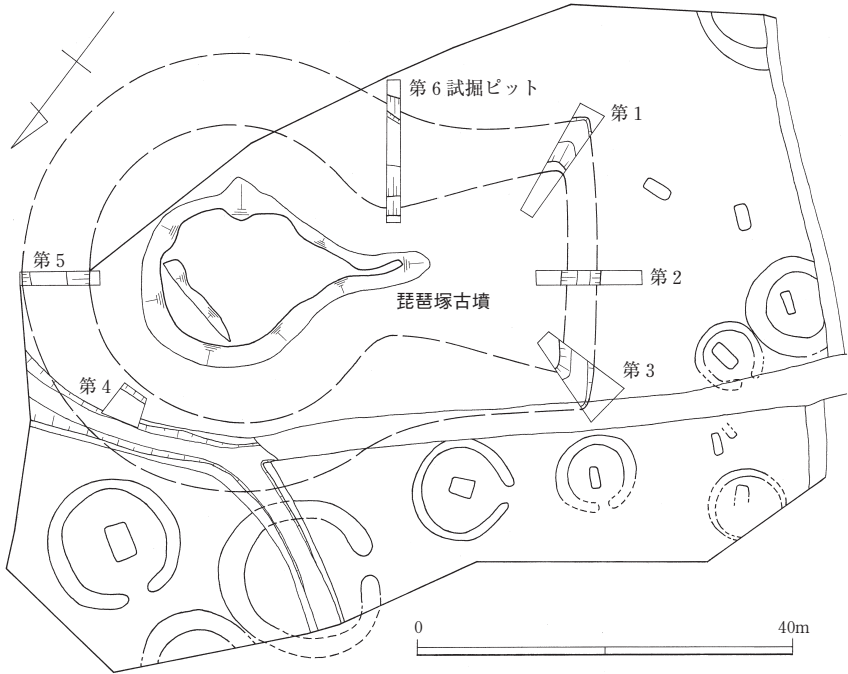


図1 琵琶塚古墳平面図・トレンチ配置図

う文章(高木1995:p.16)で知ることができる。すなわち、琵琶塚古墳の埴輪の時期を、川西宏幸による円筒埴輪編年(川西1978, 以下では川西編年と記述)のV期とみなすことが大きな根拠となっているのである。

ちょうどこの頃、集成編年の8期とみなす考えが隈昭志や宮崎敬士によって示された(隈1992:p.66, 宮崎1995:p.118)。彼らの判断根拠は明確でないが、上述の高木恭二が示した時期を集成編年に対応させれば8期から9期に相当するので、それとほぼ同様の見解が提示されたことになる。

しかし、高木はこのあと大きくその見解を変更する。藏富士寛と共同で執筆した文章のなかで、集成編年「6期の後半から7期には宇土半島基部に位置する松橋大塚古墳や緑川中流域の琵琶塚古墳が出現する」と記述するのである(高木・藏富士1998:p.70)。こうした見解変更の理由は記されていないが、埴輪の時期についての見直しがあったことは確かであろう。なぜなら、

琵琶塚古墳と同じ川西編年Ⅴ期の埴輪をもつとしていた松橋大塚古墳(高木1995：p.17)も同時に時期が変更されているからである。いずれの古墳の埴輪もⅣ期に相当するものとみなされたのであろう。こうした考えはその後にも受け継がれ、2003年の文章でも琵琶塚古墳は「5世紀中頃から後半にかけて」築造されたと記されている(高木2003：p.442)。

埴輪は古墳の築造時期を示すもっとも有力な遺物の1つである。したがって、その所属時期はきわめて重要な検討課題なのであるが、上述の高木のものとはまったく異なる見解が2人の研究者によって提示されている。

まず1人は竹田宏司で、氏は琵琶塚古墳の埴輪を川西編年Ⅱ期に位置づける。竹田は当古墳の埴輪について「円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土しており、透孔は三角形・円形が確認されている。調整は2次調整のタテハケが認められる。突帯は、突出度が高く、やや先端が丸みをもっているが、台形状に近い」と整理するが(竹田2000：p.438)、これをみれば氏の時期判定のもっとも大きな根拠は2次調整タテハケの存在を認めたことにあると思われる。

なお、竹田の見解は九州前方後円墳研究会第3回大会で示されたものであるが、その際に作成された埴輪出土古墳地名表のなかでは琵琶塚古墳の築造時期が集成編年3期か4期と記されている(古城・藤本2000：p.295)。これには竹田の埴輪の編年観が大きく影響していると思われる。

もう1人の研究者は竹中克繁である。氏は琵琶塚古墳の埴輪について「突帯突出度がきわめて高く、円形、三角形の透かし孔を一段に三方向以上穿孔する。器壁は極端に薄く、全体の形状は胴部中程から底部に行くにつれすぼまる」と述べ(竹中2003a：p.89)、それを氏の九州編年2期(川西編年Ⅲ期並行)に位置づける。そうした時期判定の根拠は、黒斑を有すること、作りが稚拙であることなどであろうと推測される。なお、これを集成編年に対応させれば5期に相当するだろう。

さて、琵琶塚古墳の築造時期にかんしては以上のようなさまざまな見解が提示されているのであるが、私は以前にもそれらについて簡単に整理したことがある。そして、「竹中克繁の見解に近い時期、すなわち集成編年5期(あるいは6期)に位置づけておくことがもっとも妥当である」との所見を示した(杉井2004：p.8)。しかし、明確に時期を限定することができていないこ

とからもわかるように、その時の検討には不十分なところがあった。とくに、埴輪とともに出土した須恵器のなかに当古墳にともなうと判断できるものが含まれているのかどうかの検討は、埴輪の所属時期にもかかわる重要な課題として残されていた。

**検討課題** これまでに述べてきたことからわかるように、琵琶塚古墳の築造時期にかんして種々の意見が出されているのは、埴輪の時期について見解の一致をみていないことに最大の原因がある。じつに川西編年Ⅱ期からⅤ期までの開きがあるのである。したがって、まずは、そうした埴輪をどのように理解すべきなのかについて整理しておく必要がある。ただし、以上のような研究の現状であるから、埴輪のみに頼ってはいはこれまでの議論を大きく進展させることは難しい。

そこで、それを補うものとして、埴輪とともに検出された土師器や須恵器の検討が重要となる。なかでも須恵器の解釈が問題となろう。

中原幹彦が以前に整理したなかでは、琵琶塚古墳は須恵器を出土した古墳に含まれていない(中原2000：p.82)。これが一般的な認識であるとするれば、埴輪の時期をⅡ期あるいはⅢ期に位置づける見解の方がより妥当性をもってくる。一方、出土須恵器のなかで当古墳にともなうと認めうるものがあるとするれば、埴輪の時期はⅣ期あるいはⅤ期となる可能性が出てくる。

埴輪、土師器、須恵器のどれか1つのみに頼らない総合した解釈が必要である。

### 3. 出土遺物の検討

今回検討する遺物は、城南町歴史民俗資料館に保管されているものである。それには、城南町教育委員会の発掘調査で出土した資料、および熊本県教育委員会の発掘調査で出土した資料のうち埴輪が含まれている。

#### (1) 埴輪(写真1～8)

**種類** これまでに報告されているとおり、円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪が存在する。ほかに種類を確定できない破片が1点存在した(写真8)。それは直径1cm程度の小円孔を有するもので、小円孔がなければ円筒埴輪の胴部と判

断して何ら差し支えがない。破片上部には突帯の剥離痕、右下隅には通常の大きさの円形透孔、左側には線刻がみられる。

透孔 透孔の形状には、円形、三角形、方形の3種類がある。このうち主流をなすのは円形透孔である(写真1・2・4)。三角形透孔は完形復元された円筒埴輪の口縁部から2段目(写真1)、および朝顔形円筒埴輪の肩部(写真6：最下の破片)にみられる。方形透孔についてはこれまでほとんど注意されてこなかったが、1つの破片においてその存在を確認した。それは写真4-7に示した破片で、その内面の写真(写真5-7)を見れば左側が垂直方向に切り取られている様子がよくわかる。

1段に穿孔される透孔の数は、完形復元された円筒埴輪では3個である(写真1)。ただし、写真4-2の破片はこれに接合する別破片を有しており、それを含めて検討すれば、この個体については1段に4個の透孔が穿たれていた可能性がある。竹中克繁が「透かし孔を一段に三方向以上穿孔する」(竹中2003a：p.89、傍点は筆者)とした理由はここにあるのだろう。

調整 外面調整は1次調整タテハケがほとんどである(写真2・4・6-左)。口縁部にヨコハケ目がみられる破片もあるが、きわめて少数にしかすぎない。

2次調整タテハケ目は、1箇所ではしか確認できなかった。それは、完形復元された円筒埴輪の最上段突帯上部にみられるもので、突帯に施されたナデを確実に切っている(写真1-上)。しかし、この個体のこの箇所以外では1次調整タテハケ目が観察されるのみであるから、円筒部を完成させすべての突帯を貼り付けたのちに、口縁部の一部を整形するためだけに2次調整タテハケが行われたと推測できる。2次調整タテハケ目はこの個体以外の破片でもまったく確認できなかったから、そうした調整手法はきわめて例外的なものであったと判断すべきだろう。したがって、琵琶塚古墳の円筒埴輪の外面調整は1次調整タテハケが基本であったとみなすべきである。

黒斑と焼成 琵琶塚古墳出土の円筒埴輪には、黒斑を有する破片が確実に存在する(写真7)。写真1の完形復元されたものでも、最上段突帯から口縁部にかけての箇所に黒斑をみることができる。しかし、こうした黒斑を有する破片がごく少数である点に、埴輪の時期についての解釈が分かれる要因が

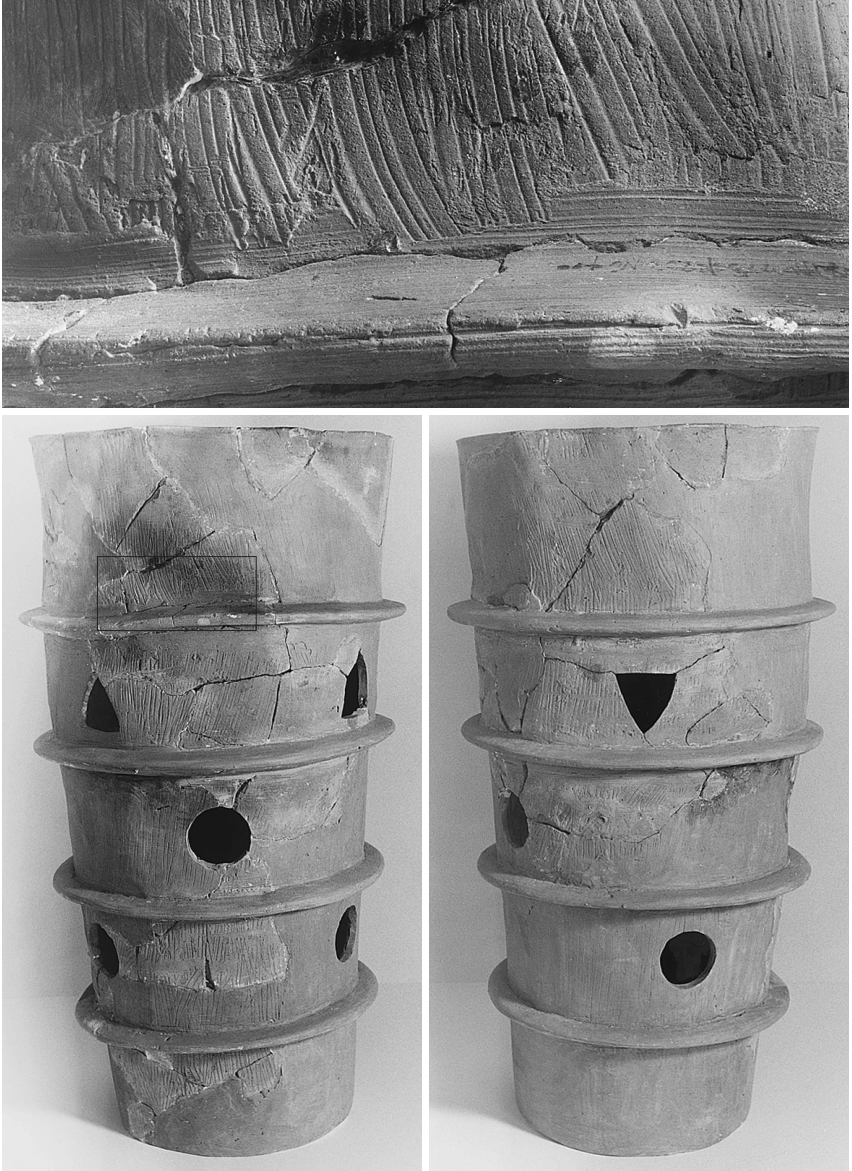


写真1 円筒埴輪とその最上段突帯上部にみられる2次調整タテハケ目  
豊崎・清田編1987-第103図の26、ハケ目の位置は左下写真の四角で囲ったところ



写真2 円筒埴輪（城南町調査出土分）の外表面

1：豊崎・清田編1987-第104図の27、2：第104図の34、3：第104図の30  
2・3は豊崎・清田編1987の実測図で示された天地方向を逆転





写真3 円筒埴輪（城南町調査出土分）の内面

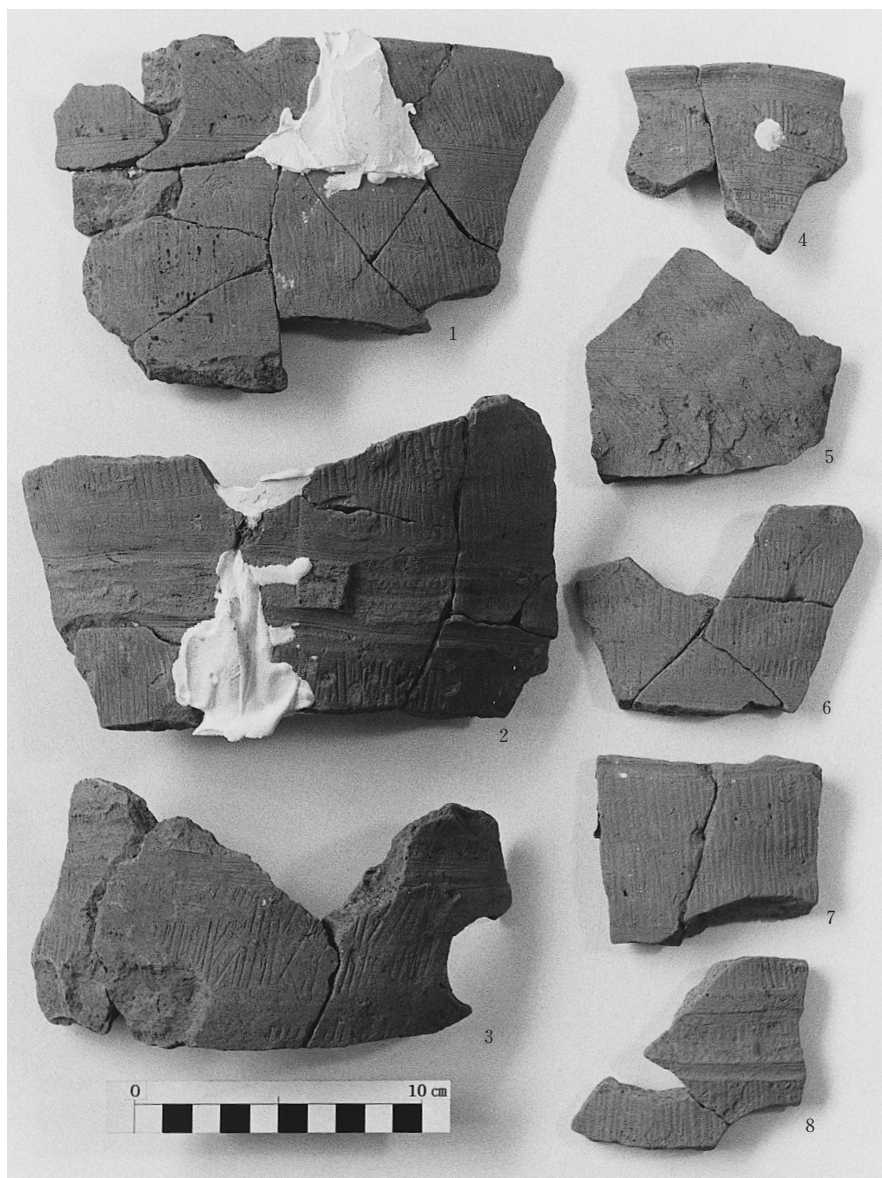


写真4 円筒埴輪（熊本県調査出土分）の外面

2：野田ほか1975-図版147の353-3、3：図版147の353-2、7：図版147の353-4、ほかは未報告



写真5 円筒埴輪（熊本県調査出土分）の内面



写真6 朝顔形円筒埴輪（熊本県調査出土分，左：外面，右：内面）

写真の破片はすべて野田ほか1975-図版147の352

外面にみられる黒色の帯は赤色顔料による彩色部分



写真7 黒斑を有する円筒埴輪片

1：豊崎・清田編1987-第104図の28、5：第104図の39

ひそんでいるように思う。

すなわち、黒斑を有する破片が存在することを尊重すれば川西編年Ⅲ期以前に位置づけられようし、そうではなく黒斑を有さない破片がほとんどを占める点に注目すれば川西編年Ⅳ期以降とする余地が生じてくる。

そもそも、黒斑の有無が焼成技法の差異、すなわち野焼きである

のか窖窯焼成であるのかの違いに対応するとの前提があり、しかもそのみが川西編年のⅢ期とⅣ期(様式では第Ⅲ群と第Ⅳ群)を分ける唯一の指標であるから(川西1978)、黒斑を有する破片がごくわずかでしかない場合、その時期をいずれに置くのかはきわめて難しい判断となる。

そこで注目したいのが、琵琶塚古墳の埴輪が大変よく焼きしまっている点である。きわめて感覚的な印象でしかないが、後述する土師器と比較しても、その焼成は良好であるように思える。この点を重視したいと思う。

小結 外面調整の基本が1次調整タテハケである点、黒斑を有する破片は



写真8 小円孔を有する埴輪片

ごく少数にしかすぎず、かつ器壁がよく焼きしまっている点、三角形や方形の透孔がみられる点などから、琵琶塚古墳の埴輪を川西編年Ⅳ期に相当するものと考えておく。

これは、当該時期の熊本県南部地域では「少数の古墳で独自性の強い埴輪の採用が見られる」とした竹中克繁(竹中2003 a : p.96)の指摘に矛盾しない。なぜなら、2次調整ヨコハケが施されない点や三角形や方形の透孔が穿たれる点、突帯が高く突出する点、朝顔形円筒埴輪の外面に指先で描いたような筋状の赤彩が施される点(写真6)など、琵琶塚古墳の埴輪には多くの特徴的な部分が観察されるからである。

## (2)土師器(写真9・10, 図2)

出土状況 城南町教育委員会による調査では、その第6試掘ピットから大半の遺物が出土したという。第6試掘ピットとは東側クビレ部の周溝部分に設けられたトレンチのことで(図1)、その埋土は17層に分割された。そのうち古墳時代の遺物の出土は15~17層に集中しており、13層では青磁片が検出された。また、「土師器の高坏・壺などが埴輪とほぼ同じレベルから検出されている」らしい(豊崎・清田編1987 : p.110)。

こうした遺物の出土状況を考えれば、第6試掘ピットの15~17層で出土した土師器や須恵器を分析することが、琵琶塚古墳の築造時期を考察するうえでもっとも有効な手段であることがわかる。そこで、今回そういった視点で遺物の観察を行ったが、調査時作成の遺物出土状況図をみるのがかなわな



写真9 第6試掘ピット出土の糸切り底の土師器坏

1 : 豊崎・清田編1987-第103図の22、2 : 第103図の23、3 : 第103図の21

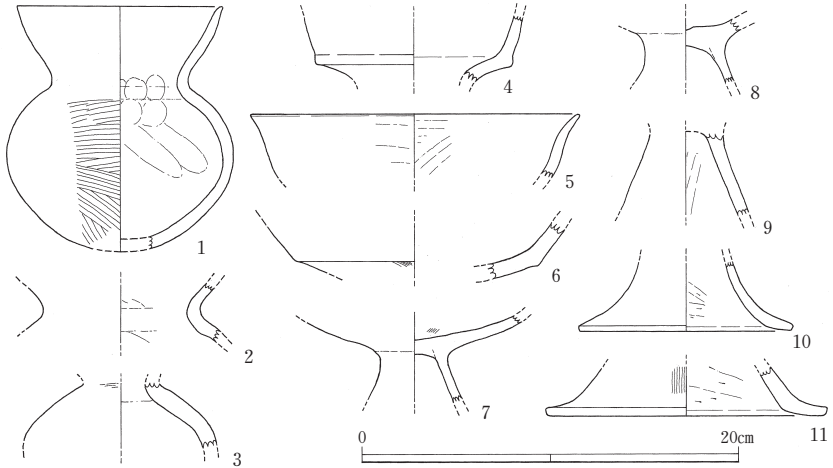


図2 第6試掘ピット出土の古墳時代の土師器実測図



写真10 第6試掘ピット出土の古墳時代の土師器

1 : 図2-1、 2 : 図2-7、 3 : 図2-8、 4 : 図2-9

かったこともあり、遺物の出土層位を明確にすることはできなかった。この点に分析の不備を残すが、以下では第6 試掘ピット出土遺物に注意を払いながら検討を行う。なお、遺物にみられる注記では、「第6 試掘ピット」ではなく「東クビレ」と記されている。

「東クビレ」の注記がある土師器 「東クビレ」という注記がなされている土師器のなかには、糸切り底の坏が含まれている(写真9)。このことから判断すれば、第6 試掘ピット出土土師器には古墳の時期よりも新しいものが含まれていることは確実である。しかし、それら以外のものは、古墳時代中期の土師器として1つにまとめることができると思われる。

古墳時代の土師器 図2には第6 試掘ピット出土土師器のうち、糸切り底の坏以外のものを示した。また、比較的形態がよくわかるものを選んで写真10に示した。これらのうち、古墳の築造時期を推測するうえでとくに重要なものは、小型丸底壺(図2-1, 写真10-1)と高坏(図2-5~11, 写真10-2~4)である。

小型丸底壺は口径11cm、胴部最大径12cm、器高13cmで、その口径と胴部最大径がほぼ等しい。調整は、口縁部内外面が回転ナデ、胴部外面が横方向のハケ、内面が指ナデである。

高坏は細片となっているものが多いが、その脚部に注目すると、ハの字状に広がったのち裾部を外方へ屈曲させるものばかりである。円柱状に細長く伸びるタイプの脚柱部が出土していない点に注意しておきたい。

小結 第6 試掘ピット出土の土師器は、糸切り底の坏をのぞくと、同一時期に位置づけてよいものと判断する。野田拓二の編年では塚原Ⅱ期(野田1982)、林田和人の編年では2期あるいは3期(林田2002)に相当しよう。

上述したように、今回土師器個々の出土層位は確認できていないが、発掘調査報告書に「土師器の高坏・壺などが埴輪とはほぼ同じレベルから検出されている」(豊崎・清田編1987:p.110, 傍点は筆者)と記されていることから推測すれば、ここで示した壺や高坏がそれらにあたる可能性はきわめて高い。したがって、これら土師器は埴輪の時期を知るうえできわめて重要な資料となる。



## (3) 須恵器(写真11~14, 図3)

上記で第6試掘ピット出土の土師器は野田拓治編年の塚原Ⅱ期、林田和人編年の2期あるいは3期に相当すると判断したが、それらは初期須恵器がともなう時期とされている。では、琵琶塚古墳の調査で出土した須恵器のなかに、初期須恵器は含まれていないのだろうか。

「東クビレ」の注記がある須恵器 まずは「東クビレ」という注記がなされている須恵器、すなわち第6試掘ピットで検出された須恵器について検討してみよう。発掘調査報告書では第6試掘ピット出土須恵器の提示はないが、今回5点の破片を確認した(写真11)。

それらはすべて甕の胴部片である。そのうち1~3の内面において、同心円タタキ目がきれいにスリ消されていることが重要である(写真11-下)。

もう少し詳しくみると、外面の平行タタキ目の粗密によって1・2と3~5の2つに分類できることがわかる。すなわち、1・2には1cmあたり6本程度の条線をもつ細かい平行タタキが、3~5には1cmあたり3本程度の粗い平行タタキが施されているのである。1・2は、その色調においても、外面が淡い黄灰色、内面が青灰色、断面があざやかな赤紫色と共通することから、同一個体に分類できる可能性がある。

さて、内面のタタキ目がスリ消される点、外面に細かい平行タタキが施される点は初期須恵器に多くみられる特徴である。したがって、5点の破片のうち1~3は、そうした時期に位置づけられる可能性が高い。

第6試掘ピット以外から出土した須恵器 つぎに、第6試掘ピット以外から出土した須恵器を検討する。これについては発掘調査報告書にもいくつか提示されており、そのなかには高台をもつ坏などもあるから、古墳の時期よりも新しいものが含まれていることは確実である。しかし、注目すべき破片がいくつか存在する。それは甕の胴部片と口縁部片である。

写真12・13には甕の胴部片を示した。

これらのうち、1~3の内面のタタキ目がきれいにスリ消されている点に注目できる(写真13)。4はそれらとの比較のために同時に撮影したもので、その内面には同心円タタキ目が残存している。また、これらの外面調整にも差異がみられる。それを詳細に記述すれば、1・3には1cmあたり6本程度

の条線をもつ細かい平行タタキが、2には1cmあたり4～5本のやや粗い平行タタキが、4には1cmあたり4本の粗い平行タタキが施されているのである。とくに、内面のタタキ目がスリ消されている1～3に比較的細かい平行タタキ目がみられる点に注意しておきたい。

つぎに甕の口縁部片をみてみよう(図3, 写真14)。

図3-1(写真14-1)は、発掘調査報告書で臆とされているが、その特徴から甕と判断したものである。口径を18.8cmに復元したが、小破片であるため確定的でない。口縁端部を丸くおさめ、そこからゆるやかなカーブを描いて頸部に至る。外面の口縁端部から約1cmのところを断面三角形の突帯をめぐらせる。突帯はその上下器面を凹状にくぼませるものではなく、器面上に明瞭に突出させたものである。突帯の頂部はやや丸い。突帯下の器面には波状文が施されている。

図3-2(写真14-2)は大型の甕である。口径を44cmに復元したが、これも小破片であるため確定的でない。口縁端部を上下に大きく突出させる点が1とは異なっている。外面の口縁端部から約1.5cmのところを突帯をめぐらせるが、この突帯は1と同様、器面上に明瞭に突出させたものである。突帯の頂部はやや丸い。突帯下の器面には波状文が施されている。

小結 上でみた須恵器の特徴のうち注目される点を整理してみよう。

まず、甕胴部片では、内面の同心円タタキ目がきれいにスリ消される点、外面に細かい平行タタキが施される点が、古い段階の須恵器にみられる特徴として注目に値する。また、甕口縁部片においても、明瞭に突出した突帯をもつ点、その突帯頂部がやや丸みを帯びる点、口縁端部を丸くおさめるものが存在する点は、古い須恵器の特徴として重要である。しかし、ゆるやかに外反する口頸部であると推測できる点、口縁端部を上下に突出させたものが存在する点は、やや時期を下げる要素となるだろう。

ごくわずかな小破片の観察にしかすぎないからさらなる検討が必要であるが、以上の諸特徴を総合すれば、琵琶塚古墳出土の須恵器にはTK216型式期のものが含まれると判断する。そして、土師器の時期を勘案すれば、これら須恵器は琵琶塚古墳にともなうもので、かつその築造時期を示すものとしてとらえてよいと推測する。



写真11 第6試掘ピット出土の須恵器甕胴部片（上：外面，下：内面）



写真12 須恵器甕胴部片の外面

- 1：豊崎・清田編1987-第103図の20、「前方部黒色土3層」の注記  
2・4：「ピワ塚周辺一括」の注記、3：「ピワ塚一括」の注記



写真13 須恵器甕胴部片の内面

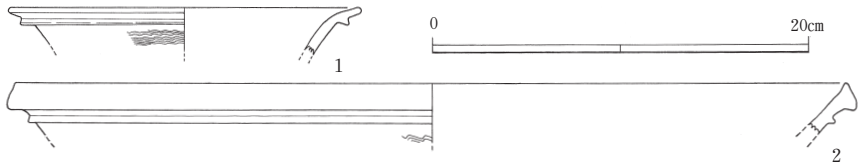


図3 須恵器実測図



写真14 須恵器甕口縁部片

1：図3-1、2：図3-2

#### 4. 琵琶塚古墳の築造時期とそれから派生する諸問題

**築造時期** 前章での検討結果を今一度ここで整理すれば、琵琶塚古墳の埴輪は川西編年Ⅳ期、土師器は野田拓二編年の塚原Ⅱ期、林田和人編年では2期あるいは3期、須恵器はTK216型式期に相当する。これらはお互いに矛盾するものではなく、むしろきわめて適切な対応関係を示している。今回検討した埴輪、土師器、須恵器は良好なセットとしてとらえられるのである。したがって、これを根拠に判断すれば、琵琶塚古墳の築造時期は集成編年7期前半に位置づけられるだろう。

**派生する諸問題** ところで、琵琶塚古墳をこうした時期と認めた場合、それはどのような問題に影響を与えるのだろうか。最後にこの点を整理し、今後の検討に備えたいと思う。

まず、塚原古墳群における琵琶塚古墳の位置づけという問題がある。端的

に述べれば、方形周溝墓や円墳を造り続けてきた塚原古墳群に、どうしてTK216型式期になって前方後円墳が築造されたのかという疑問である。しかも、それは当古墳群で初めて埴輪を樹立する古墳なのである。

これを考えるうえでは、緑川中流域という地域的まとまりのなかに塚原古墳群が存在している点を念頭におくことが大切である。とくに、当地域では、中央政権との関係をうかがうことのできる文物が比較的多く出土している点、さらに古墳時代中期にいち早く朝鮮半島系渡来文物が受容される点に注意を払わなければならない。たとえば、前者にかんすることでは、塚原古墳群所在の將軍塚古墳で長方板革綴短甲や二段逆刺鉄鏃(松本1983)が、石之室古墳で横矧板鉾留短甲(豊崎・清田編1989)が、また上益城郡御船町所在の小坂大塚古墳で長方板革綴短甲(阪口1998)が出土している点が注目される。また、これらの古墳がすべて円墳である点にも注意すべきである。一方、後者にかんすることでは、塚原古墳群所在の15号方形周溝墓で陶質土器と思われる有蓋高坏が出土している点(野田ほか1975)や、当古墳群の北約1.5kmにある迎原西遺跡で5世紀中葉の造り付け竈が検出されている点(清田1998)が重要である。

こうした地域的特性を考慮すれば、琵琶塚古墳の築造は、古墳時代中期中葉における中央政権と地域首長の政治的関係のなかで考察されるべき問題であることがわかる。

他方、熊本県地域全体に視点を移せば、琵琶塚古墳と高熊古墳の対比が興味深い問題を提示する。高熊古墳は鹿本郡植木町に所在する前方後円墳で、川西編年Ⅳ期の埴輪とTK208型式の須恵器が検出されているから(西嶋編2004)、琵琶塚古墳とほぼ同時期に位置づけられよう。

重要なのは、高熊古墳が所在する合志川流域にも方形周溝墓や円墳を造り続ける八反原遺跡が存在しており、しかもそこからは渡来文化の存在をうかがわせる馬埋葬遺構が多数検出されている点である(西嶋2005b)。また、当地域には帯金式甲冑が多く分布する。すなわち、合志川流域は、琵琶塚古墳のある緑川中流域と同様の性格をもつ地域と評価されるのである。

高熊古墳は、そのような地域に最初に築かれた前方後円墳であるという点で琵琶塚古墳と共通している。しかし、八反原遺跡とは別の丘陵に築造され

ている点、さらにB種ヨコハケが施された円筒埴輪や精美な形象埴輪を有する点で、琵琶塚古墳とは明らかにその性格を異にしている。つまり、古墳が所在する地域の特性、すなわち中央政権との密接な関連がうかがえる点、渡来文物の色濃い分布がみられる点では共通するが、そこに築かれた最初の前方後円墳の内容には看過できない相違が存在しているのである。このことをどのように評価するのは、今後の重要な検討課題となってこよう。

ところで、熊本平野を境にして熊本県地域を南北に分けた場合、琵琶塚古墳が所在する南部地域にはそれと同時期の埴輪を有す古墳や遺跡がいくつか存在するから、それら同士の比較検討も重要な研究課題である。たとえば、宇城市松橋大塚古墳の円筒埴輪(竹田2000)は、琵琶塚古墳と同様、きわめて個性の強いものである。それに対し、上天草市カミノハナ1号墳の円筒埴輪(米倉編1982)は、2次調整ヨコハケが施されないとはいえ、その作りに大きく乱れたところはない。また、宇土市石ノ瀬遺跡出土の円筒埴輪は、それが樹立された古墳は不明であるが、B種ヨコハケ目の存在など当該時期の埴輪に一般的な特徴を備えている(杉井2002)。こうした共通点や相違点の評価は、地方における窯窯焼成技術導入期の埴輪生産体制を解明するうえできわめて重要なものとなるだろう。

なお、同じ南部地域とはいっても、琵琶塚古墳が所在する緑川中流域は、八代海に面していない点で、松橋大塚古墳やカミノハナ1号墳が所在する地域とは大きくその立地環境を異にする。この点にも十分な注意を払いながら検討を行う必要があるだろう。

## 5. おわりに

古墳の築造時期の決定は、たんにそれのみにとどまる問題ではない。琵琶塚古墳を古墳時代前期に位置づけるのか、あるいは中期とするのかでは、描き出される地域の歴史像はまったく違ったものとなる。

本稿では私が以前に示したもの(杉井2004)とは異なった結論に達したが、そのことは、ものをよく観察・検討することの大切さを今さらながら教えてくれた。今後も研鑽を積みたい。



## 謝辞

琵琶塚古墳出土遺物の調査においてさまざまな便宜をはかっていただいた城南町歴史民俗資料館、および当資料館の清田純一氏に、心から感謝の念を捧げたい。

## 引用・参考文献

- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会、pp.1-70
- 川西宏幸 1988 「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』塙書房、pp.225-360
- 隈 昭志 1992 「肥後」『前方後円墳集成』九州編 山川出版社、pp.65-69
- 甲元眞之 1995 「古墳時代首長系譜の類型化－九州での事例的考察－」『西谷眞治先生古稀記念論文集』勉誠社、pp.119-141
- 杉井 健 2003 「宇土半島基部における古墳文化のはじまり」『新宇土市史』通史編第1巻 自然・原始古代 宇土市、pp.445-471
- 杉井 健 2004 「熊本県地域における古墳時代中・後期の首長墓系譜変動にかんする覚書」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』平成13～平成15年度科学研究費補助金基盤(B)(1)研究成果報告書 大阪大学大学院文学研究科、pp.3-26
- 高木恭二 1990 「西部(佐賀・熊本)」『古墳時代の研究』第10巻 地域の古墳 I 西日本 雄山閣、pp.30-41
- 高木恭二 1995 「肥後」『全国古墳編年集成』雄山閣、pp.16-19
- 高木恭二 2000 「肥後における首長墓の変遷」『継体大王と6世紀の九州－磐井の乱前後の列島情勢に関連して－』熊本古墳研究会10周年記念シンポジウム資料集 熊本古墳研究会、p.129
- 高木恭二 2003 「熊本における古墳の動向」『新宇土市史』通史編第1巻 自然・原始古代 宇土市、pp.437-444
- 高木恭二・藏富士寛 1998 「肥後における古墳文化の特質－筑後八女古墳群との比較－」『八女古墳群の再検討－周辺地域で、なにがおこったか－』発表要旨・見学会資料 九州前方後円墳研究会、pp.69-84
- 竹田宏司 2000 「熊本県の埴輪」『九州の埴輪 その変遷と地域性－壺形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表飾－』第3回九州前方後円墳研究会資料集 第3回九州前方後円墳研究会実行委員会、pp.437-442
- 竹中克繁 2003 a 「円筒埴輪の地域性－熊本県地域の埴輪－」『先史学・考古学論究』IV 考古学研究室創設30周年記念論文集 龍田考古会、pp.85-100
- 竹中克繁 2003 b 「九州における埴輪生産の受容と展開」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会、pp.235-254
- 中原幹彦 2000 「熊本における須恵器生産開始の実体－県央地域を中心として－」『継体大王と6世紀の九州－磐井の乱前後の列島情勢に関連して－』熊本古墳研究会10周年記念シンポジウム資料集 熊本古墳研究会、pp.77-93
- 西嶋剛広 2005 a 「肥後における渡来系文物の受容と展開」『九州における渡来人の受容と展開』第8回九州前方後円墳研究会資料集 第8回九州前方後円墳研究会実行委員会、pp.86-97
- 野田拓治 1982 「古式土師器の成立と展開－特に中部九州における編年試案－」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』下巻 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会、pp.947-987
- 林田和人 2002 「肥後における中・後期の様相」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 第5回九州前方後円墳研究会実行委員会、pp.117-144

- 広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社、pp.24-26  
 古城史雄・藤本貴仁 2000「熊本県宇土市郡・下益城郡・天草市郡地域埴輪出土古墳地名表」『九州の埴輪 その変遷と地域性－壺形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表飾－』第3回九州前方後円墳研究会資料集 第3回九州前方後円墳研究会実行委員会、p.295  
 宮崎敬士 1995「肥後における前方後円墳の動向」『九州における古墳時代首長墓の動向』発表要旨資料 九州考古学会・宮崎港考古学会合同学会実行委員会、pp.110-121

古墳・遺跡関連文献

- 石ノ瀬遺跡 杉井 健 2002「石ノ瀬遺跡」『新宇土市史』資料編第2巻(考古資料・金石文・建造物・民俗) 宇土市、pp.179-185  
 石之室古墳 豊崎晃一・清田純一編 1989『塚原古墳群発掘調査報告書－史跡・塚原古墳群整備事業に伴う調査Ⅱ－』城南町文化財調査報告第6集 城南町教育委員会  
 カミノハナ1号墳 米倉秀紀編 1982『カミノハナ古墳群』2(研究室活動報告14) 熊本大学文学部考古学研究室  
 小坂大塚古墳 梅原末治・古賀徳義・下林繁夫 1925「上益城郡小坂の大塚古墳」『熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊 熊本縣、pp.56-71  
 阪口英毅 1998「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲－変遷とその特質－」『史林』第81巻第5号 史学研究会、pp.1-39  
 將軍塚古墳 松本健郎 1983「將軍塚古墳の再検討」『上の原遺跡』I 熊本県文化財調査報告第58集 熊本県教育委員会、pp.211-219  
 高熊古墳 田辺哲夫 1964「高熊古墳調査報告(その1)」『玉名高校考古学部部報』第7号 熊本県立玉名高等学校考古学部  
 田辺哲夫 1967「高熊古墳調査報告(続)」『玉名高校考古学部部報』18号第2部 熊本県立玉名高校考古学部  
 隈 昭志 1992「高熊古墳」『前方後円墳集成』九州編 山川出版社、pp.254-255  
 西嶋剛広編 2004「高熊古墳第1次・第2次調査概要」『考古学研究室報告』第39集 熊本大学文学部考古学研究室  
 八反原遺跡 西嶋剛広 2005b「八反原遺跡」『九州における渡来人の受容と展開』第8回九州前方後円墳研究会資料集 第8回九州前方後円墳研究会実行委員会、p.419  
 琵琶塚古墳 野田拓治・松本健郎・島津義昭・江本直ほか 1975『塚原－熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査－』熊本県文化財調査報告第16集 熊本県教育委員会  
 豊崎晃一・清田純一編 1987『塚原古墳群発掘調査報告書－史跡・塚原古墳群整備事業に伴う調査Ⅰ－』城南町文化財調査報告第5集 城南町教育委員会  
 隈 昭志 1992「琵琶塚古墳」『前方後円墳集成』九州編 山川出版社、p.257  
 松橋大塚古墳 富樫卯三郎 1978「向野田古墳」宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集 宇土市教育委員会  
 高木恭二 1992「松橋大塚古墳」『前方後円墳集成』九州編 山川出版社、pp.262-263

三辻利一・辻本良介・高木恭二・中原幹彦 1999「熊本県内の古墳、窯跡出土  
須恵器と埴輪の蛍光X線分析」『塚原平古墳』不知火町教育委員会、pp.64-  
95

迎原西遺跡 清田純一 1998「迎原西遺跡」『今どきの考古学－くまもと考古速報展－』熊  
本県立装飾古墳館展示図録第10集 熊本県立装飾古墳館、p.37

挿図・写真出典

図1：豊崎・清田編1987の第102図を改変のうえ再トレース。

図2：豊崎・清田編1987の第103図から選択・一部改変のうえ再トレース。

ただし、1・11は筆者原図による。

図3：筆者原図による。

写真1～14：筆者撮影による。